様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０６７０２

研究課題名（和文）近代日本政治における「競争」　陸奥宗光を中心に

研究課題名（英文）Mutsu Munemitsu and the concept of competition in modern Japanese politics

研究代表者
佐々木　雄一（Sasaki, Yuichi）

首都大学東京・社会科学研究科・助教

研究者番号：８０７７９５３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代日本政治において競争や利益の観念がどのように捉えられ、実践されたのかを、陸奥宗光を中心に分析して明らかにすることを目指した。陸奥の思想形成という点では、従来論じられてきたような功利主義という特定の思想ではなく、実践的関心のなかからある種の思想が立ち現われてくることを、幕末・明治初期の思想潮流と重ね合わせながら明らかにした。そして、競争概念によって基礎づけられる代議政治は、陸奥が推進して日本でも生じつつあったがその死とともに終わり、調和を重視する伊藤博文が国政に政党を取り込んでいったことを示した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on Mutsu Munemitsu, one of the Meiji leaders and Meiji intellectuals, this research project aims at understanding how the concepts of competition and interest were accepted in modern Japanese politics. This project reveals that Mutsu's political thought was based on his practical experience and concerns rather than Utilitarianism, and that he strongly promoted the development of representative government and party politics which were based on the concept of competition. However, such development ceased with his death in 1897.

研究分野：日本政治外交史

キーワード：近代日本　陸奥宗光　競争　利益　代議政治　立憲政治　デモクラシー　明治初期の政治思想

１．研究開始当初の背景

近代日本政治における競争の観念について陸奥宗光を中心に分析する本研究には、三つの学術的背景がある。

第一に、民主政治に関する古典的な議論である。J．S．ミルは『自由論』において、異端のなかから将来的により良い考えが出てくると論じた。言論の自由を、政治の改善という観点から擁護したのである。A．トクヴィルも、『アメリカのデモクラシー』で、可謬性や試行錯誤といったアメリカの民主政治の特徴を指摘した。ここには、現在良い政治を行うためのものというよりも、長期的な視点を取り入れ、修正や改善、進歩といった観点から民主政治を評価する考え方がある。それに対し、立憲政治や民主政治の導入が課題となり、あるいは取りざたされた明治・大正期の日本では、そうした議論はあまり目にしないように思われる。そこで、将来的な修正・改善の契機としての競争、という点に着目して、近代日本政治を分析した。

第二に、近代日本政治に関する巨視的理解である。立憲政友会を組織した伊藤博文は議会や政党の意義を認めていたが、それは政治統合に必要だと考えたからだった。日本初の本格的政党内閣を組織したとされる原敬も、政党間の政権交代には否定的だった。国政に政党を取り込んでいくことと、複数政党間の競争を基本的な政治のあり方と捉えることとの間には差があった。それに対し陸奥宗光は、競争の価値を高く認めていたように見え、その分析を通じて、近代日本政治における代議政治の展開がより明確に理解できると考えた。

第三に、利益の観念と陸奥宗光に関する研究の文脈である。J．ベンサムの主著を翻訳した陸奥において「利」の観念が、そして日本の「利」の観念の発達において陸奥が、重要な存在であったことはよく知られる。しかしその「利」の発想が、外交における国益追求といかなる関係にあるのか、また陸奥はベンサム・功利主義・荻生徂徠の思想的影響が強いと言われるが本当に陸奥の書いたものや生涯全般を分析したときにそのように言えるのか、といった点については検討の余地が多分に残されている。

２．研究の目的

近代日本政治において競争の観念がどのように位置づけられ、政府内で実践されたのかを、陸奥宗光を中心に分析して明らかにし、かつそれにより現代民主政治研究にも新たな知見を提供するというのが本研究の目的である。具体的には、（1）近代日本の政治・外交において利益はいかなる概念として捉えられていたのか、（2）1880 年代から 90 年代にかけて日本が立憲政治を導入する際、競争の意義はどのように理解されたのか、（3）1890 年代の日本の政治過程において、競争はどこにいかなるかたちで生じたのか、という三点を明らかにすることを目指した。（1）～（3）のいずれにおいても中心となる人物は陸奥宗光であり、陸奥の思想と政治活動、近代日本の政治・外交において果たした役割を総合的に明らかにすることも研究目的である。

３．研究の方法

基本的な研究方法は、資料の収集と読解である。日常的に刊本やアジア歴史資料センターなどインターネット上で閲覧可能な資料に当たり、東京及び近郊の資料館（国立国会図書館憲政資料室、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫、同原資料部、神奈川県立金沢文庫、三井文庫など）で資料調査・閲覧・収集を行った。並行して、新規資料の発掘にも取り組んだ。資料調査は、イギリス（ロンドン、ケンブリッジ）、大阪、和歌山、奈良などで行った。また、国内外の学会や研究会で報告を行い、研究者・関係者からの指摘や情報提供を得た。

４．研究成果

近代日本外交における利益の観念について、本研究代表者がこれまで取り組んできた外交史研究と結びつけて分析した。陸奥が近代日本外交の判断様式のひな型をつくった面があり、そこでは利益が重視されている。しかし仔細に見ていくと、国家形成期の官僚・政治指導者である陸奥は、外交官として生きた小村寿太郎や林董とは違いも目立つ。日本外交における国益、利益、それらの具体的な中見といった点は、むしろ陸奥以降の外交官に関してさらにくわしく検討していく必要があることがわかった。

陸奥の思想形成に関しては、体系立った知識を学んだというよりは、長年の実践的な関心と幅広い学習を通じてある種の思想をつくり上げたことを、幕末・明治初期の思想潮流と照らし合わせながら明らかにした。陸奥が若い頃に学んだのは、荻生徂徠に限らずより広く儒学・漢学の基礎的教養であり、揺れ動く時勢に関心を持って学問

形成や活動を行っていた人物たちから教わっていた。同時に、蘭学や英語も学んでいる。陸奥がベンサムの著作に接する前に記した政治･行政上の意見書や書簡のなかに、社会契約論や功利主義の発想とみなすことができそうな文言もあり、またベンサム・功利主義だけでなく明治初期の知識人が親しんだ多くの西洋の書物を読んだこともわかっている。つまり陸奥は、功利主義を学び、会得したというよりは、自身のなかで醸成されていた考えをそこに見出したのである。本研究では、テクストの分析とともに国内外の資料調査にも取り組み、陸奥の思想形成過程を解明するうえで重要な新規資料を多数発掘した。

近代日本政治における競争の観念と代議政治の展開については、一方に陸奥がおり、他方に伊藤博文がいるという構図が明確になった。国政における議会や政党の役割を認めていく勢力としては伊藤と陸奥がいるが、伊藤は政党を、国政を統合するためのものと捉えていた。それに対し陸奥は、選挙の本質を競争と捉え、政党・政治家・政治指導者間の競争を国民が判定すると考えていた。伊藤の原理は調和であり、陸奥の原理は対立と競争であった。1890 年代、陸奥の政治行動によって、政党を巻き込む政権交代が生じる。しかし陸奥のような、競争が重要な要素となる代議政治観と、そうした日本政治の展開は、1897 年の陸奥の死とともに曲がり角を迎え、以降、国政に政党を取り込む主体は専ら伊藤となる。以上の分析に基づくと、近代日本政治においては複数間の競争の観念があまり根づかなかった、というのが暫定的な結論になる。後の原敬内閣や、イギリス型政治を志向していたとされる大隈重信及びその周辺の政治構想も含めてさらに検討することが、今後の新たな課題となる。

研究成果をまとめた、あるいは取り入れた著書や論文は別記の通りで、今後さらにいくつかの著書・論文を発表することになっている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①佐々木雄一、「近代日本の代議政治と陸奥宗光　立憲政治, 競争, デモクラシー」、『年報政治学』、査読有、2018 年第 1 巻、2018、印刷中

②佐々木雄一、「陸奥宗光の思想形成　明治初期政治思想の一例として」、『法学会雑誌』、査読無、59 巻 1 号、2018、印刷中

〔学会発表〕（計　3　件）

①佐々木雄一、「日本における代議政治の起源と陸奥宗光　「競争」概念を中心に」、日本政治学会 2017 年度研究大会、2017 年 9 月 24 日、於法政大学

②Yuichi Sasaki, “International Norms and Imperialism: The Diplomacy of Modern Japan, 1894-1922”, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）、2017 年 8 月 31 日、於リスボン

③佐々木雄一、「近代日本外交の論理転換日英同盟交渉過程を中心に」、日本国際政治学会 2016 年度研究大会、2016 年 10 月 16 日、於幕張メッセ

〔図書〕（計　1　件）

①佐々木雄一、『帝国日本の外交 1894-1922 なぜ版図は拡大したのか』、東京大学出版会、2017 年、452 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

⑴研究代表者

佐々木　雄一（SASAKI, Yuichi）

首都大学東京・社会科学研究科・助教

研究者番号：80779538

⑵研究分担者

（　　）

研究者番号：

⑶連携研究者

（　　）

研究者番号：

⑷研究協力者

（　　）